

第6日

令和4年12月6日（火）

午後3時10分再開

○議長（半田雄三君） 休憩前に引き続き会議を開き、一般質問を続行いたします。

次に、16番実藤輝夫議員の質問を許可します。16番実藤輝夫議員。

（16番実藤輝夫君登壇）

○16番（実藤輝夫君） 今日の一般質問の最後になります。16番実藤輝夫でございます。

今月、12月になりまして、1年を振り返る。そして、有能な数多くの人たちがこの1年のうちにお亡くなりになりました。安倍元総理をはじめ、先ほど出てきました農業の大家、山下惣一さん、そして今日、私がここで述べたいと思います昭和・平成の経済人、巨星と私は思っております稲盛和夫さんのことでございます。この人の業績を踏まえて、この朝倉市が少しでもよくなるように、今日はその話をしてみたいと思います。

非常に実績のある有名な方にもかかわらず、それほど多く稲盛和夫さんのことを知っている人はおられないような気がいたします。この人に学ぶことが、どれだけこれからの日本人、生き方、そして経済人、日本経済の役に立つかということを、私は今日改めて感じております。

御承知のとおり、鹿児島県に生まれ、京セラを創始・創設され、そしてその後、現在の第二電電、KDDIを創設され、2010年には経営破綻した日本航空を見事に2年間で再建した、すばらしき実績の持ち主であります。

その稲盛和夫さんが中心となつてつくられた京セラフィロソフィー、そしてそれに基づく日航フィロソフィー、これを私は市長と質問をやることによって、少しでも朝倉市の発展に寄与していただきたいと思っております。

以下、詳しいことは、質問席より質問を続行してまいります。よろしくお願ひ申し上げます。

（16番実藤輝夫君降壇）

○議長（半田雄三君） 16番実藤議員。

○16番（実藤輝夫君） 登壇して申しましたように、「フィロソフィー」という英語ですけども、一般的には「哲学」というふうに言われておりますが、これ、今回、私が一般質問することによって初めて知ったとか、あるいはそうだったのかという職員の皆さんもおられるのではないかと思います。

私も、稲盛和夫さんについては、長年、「致知」という出版会社の本を読みながら、いろいろ教えていただいた一人であります。今年の8月にお亡くなりになって、10年前に五木寛之さんとの対談、「何のために生きるのか」という本を改めて読ませてもらいました。人生哲学が経営哲学となり、先ほど述べたような業績を成し遂げられてこられました。先月、稲盛和夫さんのNHKでのインタビューを90分、何度も何度も見て繰り返しながら、

本当にすばらしい人が亡くなられたと、そういう思いでいっぱいです。

市長にも少しはそういうお話もする機会もありましたけども、共に前向きに、こういった先人の思いを少しでも朝倉市の中に植え付けていただきたい、そういう思いで質問を続けます。

一番最初に、朝倉フィロソフィーと書いているのは、京セラフィロソフィー、ANAフィロソフィー、その他幾つもあるんですが、日航フィロソフィーという、この基本理念に基づくJALの再建という非常にすばらしいことを、私は今日、市長に今後、朝倉フィロソフィーとして策定し実践していただきたい、そういう思いで一般質問を行っております。

まず、JAL企業理念として、「JALグループは、全社員の物心両面の幸福を追求し、一、お客さまに最高のサービスを提供します。一、企業価値を高め、社会の進歩発展に貢献します。」、ここから入ってまいります。でも、これは、今聞いてそっと頭に入った人と、何だそんなことは当たり前じゃないかと思った人、いろいろあると思いますが、特筆すべきことは、企業理念の1番に「全社員の物心両面の幸福を追求し」、ここからスタートすることです。私は、市が発展し、市民の安寧を基にするのは、市民だけではなくて、まずもって市長以下、市の職員が、自分たちの仕事を行うことがいかに自分たちの幸福を追求し、そして、またそれが家族、ひいては市民のためのサービスにつながる、こういう考え方の下にこれは成り立っています。

これを出したときに、あちらからこちらから、企業理念として社員の物心両面の幸福を追求するのを1番に持つとは何事かとか、それは違うんじゃないかという話があったそうです。稲盛和夫さん曰く、それは違うと。JALの職員一人一人が意識を改革し、自分の仕事は自分たちの幸福追求につながるんだと、この心を持って仕事に当たりサービスをすることによって、このJALは生き返るんだ、国民皆様から信頼されるJALになるんだということをととと述べて、これを一番最初に出したそうです。

私は、今日のこの話を、願わくば全職員の皆さんがお聞きになって御判断を頂きたい。自分たちが頑張ることが自分たちの幸福追求につながるんだ、ひいては家族の幸せになるんだ、それを頑張るやることが自分たちに与えられた使命である市民サービスにつながっていくんだ、これは恐らく林市長が同じ考えで思っておられることではないかと思えます。

JALフィロソフィーは、会社全員が持つべき意識・価値観・考え方、「JALのサービスや商品に携わる全員がもつべき意識・価値観・考え方として、JALフィロソフィを策定しました。これにより、私たちは同じ価値観をもち、判断および行動をしていくことで、全員が心をつにして一体感をもって、お客さまに最高のサービスを提供し、企業価値を高めることで、社会の進歩発展に貢献していくよう全力を尽くしていきます。」、これが最初に出てくるところであります。これは、市民憲章とか、市が市民に対して何をやるかにをするというのではなくて、まずもってJALそのものがどう変わっていこうと

するのかという大前提の基本理念であります。

今後、林市長は、今回の議案にも上程されております組織機構、来年以降も新たな組織機構の中でいろいろ行われていくと思いますが、やはり「笛吹けど踊らず」ではなくて、市長を中心とした幹部の皆さんの考え方が全職員に伝わり、一人一人が市長になったつもりで頑張る、こういった体制をつくっていくことが必要ではないかと思っております。そういう意味で、これを出して、市長にエールを送っておるわけです。市長、御見解をお伺いしたいと思います。

○議長（半田雄三君） 市長。

○市長（林 裕二君） まず、稲盛さんが今年8月に亡くなりました。まさに、言われましたように「巨星落つ」でございます。残された功績は非常に大きいと、それを朝倉フィロソフィーとして今後やっていかないかということでもあります。大変大きな示唆を与えていただく御質問を頂きました。

まさに、私は、市長と市民が一緒になって町をつくっていくと言っています。当然、市民のために働く。私も含めて、市の職員が同じ気持ちで、同じ方向を向いて頑張っていくということが大事であると。今、お話を聞きまして、そのことが個人としても、また家族に及ぶような幸せであると。そして、また一番大事な市民のための市役所、市民サービスをする市の職員といったことに合致すると。これが相乗効果を与えるということでございますので、市の組織を、今、一部変えていこうということで考えておりますので、ぜひ生かしていただくということで捉えさせていただきます。

○議長（半田雄三君） 16番実藤議員。

○16番（実藤輝夫君） 強くこの話をしたいんですが、時間の関係上、かいつまんでしかやれません。

これを述べておりますが、先ほど述べましたように、2010年にJALが経営破綻し倒産と。そこで、2010年の末に、大西賢さんという社長と、そして稲盛和夫さんが会長に就任されて、再建に乗り出された。2年後に1,800億円の営業利益を出したと。奇跡的な業績であります。

このときに稲盛和夫さんが述べられたのが、先ほど申しましたけども、意識改革。

1つは、リーダー教育です。やっぱり幹部が、日航は本当にエリート集団でした。私も、大学のときに憧れました。ところが、とてもとてもエリートが行くところです。スチュワーデスも本当に高嶺の花というぐらいに給料も高かった。すごかったです。今からもう五十数年前になりますけど。

そのリーダーが変わること。もう本当に稲盛さんの話、インタビュー聞きますと、最初会ったときは、「もう分かっどるち。ああ、あんたが言いよるとは分かっどるばい」というような態度で接せられたそうです。これじゃあ、駄目だと。頭のよさと仕事に対する熱意と考え方とは違うと、そういうことを稲盛さんは言われ、リーダー教育。

もう1つは、全社員の意識改革、職員の意識改革ということです。これは、私、五十数年前から、東京のほうに行って、帰ってきたりしていましたので、JALを使っていました。そのときにやはり、あまり今から、ちょっと気づきませんでしたけども、杓子定規なようなスチュワーデスの対応。

先日、期せずして行政視察で行きと帰りに日本航空、JALに乗りました。私はこれをやろうと思っていましたんで、裏の後ろのほうに行って、スチュワーデスの行きと帰りの時に、「本当にどんなふうにやっていますか」と言うたら、生き生きと私に答えられました。「いや、本当に素晴らしい方でした。私たちはそれに基づいて、研修、実習をやっております」、あまりほかの人は気づかなかったかもしれんけども、昔を知っている私からすると、スチュワーデスの対応も非常に私にとっては丁寧でした。ああ、こんなにやっばり変わるもんだなと。生き生きとした姿が出てきました。

このことを、やはりどのようにやられていったのかというのが、最後に言いますけれども、結局、これを策定するだけじゃ意味がないわけです。市長、そういうことでしょう。こういうのは、どこでも会社は持っています。地方自治体も一つの理念というのを持っています。しかし、これを策定しただけでなく、浸透させていく努力がなされてきたということです。ここに私はすばらしさを感じます。まずもって社員の皆さん、あなたたちの物心両面の幸福を追求することですよ。そのためには、あなたたちが本当の意味で意識改革をして頑張っていきましょう。そうしたらサービスが好転し、みんなに好かれるJALになるんですよということを、朝倉市に切り替えればいいんじゃないかと思います。言葉だけじゃなくて、これが大事だと思いますので、時間かかりますけど、ここを指摘させていただきたいと思います。

どうやって浸透させているか。先ほど、スチュワーデスに実際聞きましたから。

まず、JALフィロソフィーを学ぶ教育というのがあるそうです。全社員、年3回受講する。社員3万3,000人いるそうですけども。

2番目に、現場での取組。参加者は役員から新入社員まで、階層もその都度、千差万別で、5名程度のグループをつくって、時間的にもできるときにやるそうです。だから、いろんな意見が出てくる。それから、フィロソフィーの項目ごとにテーマを毎回変えて、2時間、チームに分かれて討議を行うそうです。

最後に、特筆すべき、職場によってはこれ、皆さん、こんなことが成り立つんだろうかってぐらい、あのエリート集団、エリートのスチュワーデス、職員の中で。今日のJALフィロソフィーを設定して、このように実行していこう。フィロソフィーに何項目もずっとあるわけです。今日はこれをやっていこうと、それから、こうすればJALフィロソフィーに沿った行動になるはずだ、これを毎日のように社員が発表して仕事に当たるそうです。

本当にそうなのかなというぐらいに、皆さんが聞いていてどうですか。教育長、どんな

ふうに思われますか。教職員の関係も含め、教育行政も、職員を含めて、この話を聞いて教育長として御見解をお伺いしたいと思います。

○議長（半田雄三君） 教育長。

○教育長（早野展生君） 失礼いたします。

私も稲盛和夫さんの書籍は過去数冊読まさせていただきました、勉強させていただきました。

今現在、朝倉市教育委員会といたしましては、先月6月の定例議会でも述べさせていただきましたけども、朝倉市小中学校の令和の教育十訓というのをこの前御提案させていただいて、各小中学校に周知をして、朝倉市の目指す子ども像というものを示しているところでございます。その結果はすぐには出にくいというふうに、まだ1年たっておりませんけども、思っております。まずは、この1年間の結果を、年度末に小学校4年生から中学3年までアンケート形式で取ってみたい、その結果を継続的に検証していきたいというふうに考えているのが1つでございます。

もう1つは、教職員に対してでございます。朝倉市の小中学校の教職員、先生方に対しては、月1回の定例校長会並びに月例の朝倉市教育委員会通信というのを、私の文責の下、発行させていただいております。その教育委員会通信の中には、これは昨年度でございましたけども、教育とは何かとか、どのような子どもを育てていくのか、または、そのためにはどのような方法をしていったらいいのかなどを交えまして浸透を図ってまいりましたところがございますけども、なかなか十分ではございません。さらに研鑽を深めていきたいというふうに考えております。

○議長（半田雄三君） 16番実藤議員。

○16番（実藤輝夫君） 市長も、教育長も、稲盛和夫さんのフィロソフィーの考え方については同意見、異論はないんじゃないかと思いますが、これはどういうふうにしてつくったかというのが非常に大事だと思いますので、その点をちょっと市長に。

これ、各現場の各部門から50名ぐらい選出して、その後、10名、メンバーに選出と、各部門から。上からばんとつくるのではなくて、各部門から1人ずつ、部門の専門家みたいなあるいは意見を述べるような人たちを集めて、そして京セラのフィロソフィーを基にしながら、日航に合わせたようなものをつくる。だから、このでき上がったものが、上からの上命下達の考え方ではなくて、ボトムアップのような考え方でこれがつくられたということが非常に重要で、社員が自分たちでつくったというところに大きな有用なものがあるというふうに私も思っております。

こればかり長くやるわけにはいきませんが、私の思いが市長と教育長も含めてそう違うことではないと。恐らく来年に、市長は意気込みを持ってまた自分の考え方を進めていかれようとしているので、その基になるもの。幾ら話し合いをしても、指針になるものがないと、なかなか総論的な、俺が意見だけで終わってしまう。先ほど述べたような職場の社

員たちが、市のほうは職員たちが、自分たちが発表し、自分たちがこうやろうというようなことが日常茶飯事に行われる体制が、これから先、林市長の下ででき上がったらいいなというふうに思っております。

恐らく、私の意見が、こういう質問がすぐに通るとは思っておりませんが、やはりこれを抜きにして将来の朝倉市はないとやっぱり思っておりますので、よろしく願いいたします。市長、簡単でいいですけど、そこをよろしく、もう一回。

○議長（半田雄三君） 市長。

○市長（林 裕二君） 職員がそれぞれ当事者意識を持つ。自分が例えば市長だったとか、課長だったとか、そういった意識をみんなが持って、そして経営意識、そういったものを持てるような、そういった組織が活性化するんだらうというふうに思いますので、参考にさせてください。

○議長（半田雄三君） 16番実藤議員。

○16番（実藤輝夫君） 先ほど言ったこと、実際やられていることをもう1回掘り起こして検討していただきたい、具体的に。よろしく願いいたします。

時間の都合で、こればかりやるわけにいきませんので、次に行きたいと思いますが。

2番目、復旧後の復興対策、もちろん災害後の復旧です。

先ほど、3番議員から鋭い指摘がありまして、総務部付部長がいろいろ話をされた。1つ言えば、それはこれまでなされてきた5年半における復旧活動が主であったのではないかと。

市長、復旧、復興という言葉が一つになって使われているのが多いんですが、實際上、復旧と復興という言葉が違うように、中身も違う。現状は復旧という形でなされてる。ダブる部分もありますけど、復興。復旧と復興はまずもってどう違うのかという認識がないと、このことは語れないというふうに思いますが、市長の認識で復旧と復興の違いを簡単に述べていただきたい。

○議長（半田雄三君） 市長。

○市長（林 裕二君） まさしく、言われますように、復旧時期3年、再生期4年、発展期3年で計画を立てております。

復旧時期は、壊れたところを直すというのが基本になろうかと思えます。

復興になってきますと、それを確たるものとするために、その地域が失った価値を高めながら、今度の災害で言えば、より安全な形をつくっていくと、これはソフトも含めて。防災拠点の整備等がそれに当たろうかというふうに思えます。

○議長（半田雄三君） 16番実藤議員。

○16番（実藤輝夫君） 私がこの質問をするというのは久しぶりなんですが、やはり被災地の方々、8か所大きくありますが、それぞれ復旧活動はなされている。しかし、これからの生活、展望という意味での復興は一体何なのかという問いを受けます。帰って来たい

けど、ただ元に戻っただけでは、なかなかそこに住み着いて、自分には行きたいけど、もう80近い。息子は50だけども、嫁が行こうとしないと、そういう意見をいっぱい聞くわけです。

この前、市報の中に、松末橋ができて、最後に「復興へ また一步」というような言葉が書いてありました。復旧はなされた。まさに、その後、復興への道を歩まなきゃいけない。これは被災を受けた地域によって度合いも違ひましようし、いろいろあると思いますけども、先ほど市長が述べられたし、3番議員も述べたように、復旧の時期を大体終わろうと。終わってなけりゃならんし、再生、そして発展というところに行かなきゃいけない。

今の段階で見る限りにおいては、市長が述べる——後からも言いますが——復旧・復興のシンボルの市庁舎は来年から着工していくかもしれないけど、私たちのところはどうかのと、こういった意識がやはり被災地の方にはあるし、そういったものを払拭し、展望を出していくためにも、復旧を総務部付部長はいろいろ実績を上げられて、すばらしいことだと思いますが、もう一步、これから復興への道を進んでいただきたい。これこそまさに、市庁舎を造るならば、それが市長の言う復旧・復興のシンボルになる。今のままでは、およそ復旧・復興のシンボルとはならないと。周りがあつてこそ、よくなってこそ、ほかよくなってこそ新市庁舎が復旧・復興のシンボルになるというふうに私は考えています。

その点、これから、まだまだ復興というものへの考え方、道筋ができていませんけども、もう一回、違いではなくて、市長がどう取り組んでいこうとされているのかがあればお答え頂きたいと思います。

○議長（半田雄三君） 市長。

○市長（林 裕二君） 松末橋の完成式の話が出ました。その時に、地域で中心的に対応された方の言葉がまさしく象徴的な言葉でありました。分断されていた道路が結ばれたと、これにつながりが広がっていくという話をされたところであります。

これからの復興につきましては、議員も言われましたように、生業ができる、そして通常の生活が明るくできるといったことが基本になろうかと思ひます。これに向けまして、各種施策をしっかりとやっけていくと。まさしく、市と地域の人たちが共に力を合わせてやっけていくと。それに関係者、民間、そういったものが相乗的な効果を上げるようにやっけていくと。そういった、ある面の理想も求めてやっけていくことが復興だろうというふうに思ひます。

○議長（半田雄三君） 16番実藤議員。

○16番（実藤輝夫君） 市長の意欲は十分に伝わると思ひますが、被災地の方々にとっては、やはり具体的な、具体策というものが欲しい、これが本音ではないかと思ひます。

ようやく8割程度、復旧の目処がついてまいりました。細かいこともあるでしょうが、人的被災を受けた方も、今日の答弁ではかなりの、担当室も含めて頑張っけて、もう一步というところまで来ているそうです。非常に好ましい。

しかしながら、先ほどから述べますように、復旧はなったが復興はというふうになってしまうと、非常に先の展望がない。戻って来ようとも戻って来られない。少し遅いぐらいでありますけども、今が、これからが市長の復興への道を具体性を持たせた形で定義していただきたい。これは非常に、私はそうした方々の思いを市長にお願いしたいと思います。時間的な配分もありますので、次に行きます。

地域環境整備事業と地域振興策です。

これは、思い起こせば、私が昭和54年に市議会議員になった頃、その頃はたしか生活環境整備事業と言ったような気がしたんですが。これは、地域から、市ができないもので、自分たちのところでやれるものが何とかならないのかというようなことを聞く。これについて、細かいことは明日、4番議員が地域環境整備事業を中心としてやるということですので、その中身については私も深くやりません。思いだけ。

そういったときに、2,000万円からスタートして3,000万円になり、今5,000万円ですが、これは当時から今日まで使い勝手のある非常にいい政策だと言われてきました。これの深い突っ込みはまた明日やられると思いますが、それはそれとして、私が今、地域振興策というふうにその後に書いておりますことでもあります。

この環境整備事業は、土木事業を中心とした舗装とか、市道とその他。今年度から、浚渫あるいは草の伐採というのが入りましたが、それもやっぱり土木的な話です。

市長、これは、何で私がこの話を出したかということ、今回、決算委員会で1番議員がスズメバチの話がされました。これに対する対応措置は、今の予算措置ではできていない。できない。それから、4番議員が先般、コウモリの話もされました。これも地域では大きな問題でありながら、地域環境整備事業の対象にはならない。じゃあ、有害鳥獣問題か、それでもない、当たらないといった中途半端なところにあります。それを聞きながら、ああ、昔、こういうことがあったなと思い出しましたので。

こういう問題がありました。十数年前、甘木町に新天街ちゅうところがあります。あそここの一角が火事で焼けまして、そして近々、大型台風が来るという状況の中に、私も議員で、ちょうどその時にその近くのところに行きましたら、お願いしますと、何とかしてくださいというふうと言われて、本当に緊急かつ危険性がある、そして、当時、元の塚本勝人市長の時でしたけども、井上隆昭助役とかはもういろいろ話合いをしましたが、予算が無いわけです。該当しないんです。どうしようかどうしようかちゅう話の時に、ある環境課の係長が横浜の条例を持ってきました、議員さん、こういうのがありますと。まさにそれができるという条例なんです。おっせこっせしながら、どうやって、もう数日後に台風が来る。そして、室外機やら瓦やらスレートやらが飛んでいくちゅうような、もう本当にひどい火事後の状態でしたけども。それを、いろいろ話合いをすることによって、緊急避難的に地域環境整備事業を甘木地区に頼みました、それは市が認めるということで。これを、当時160万円ぐらいで、今、その前に壁ができておりますけど、私もこの前、改



めて見に行きました。そういうことが起こった。その当時も、非常に老朽化した家屋をどうするかとかいろいろあったんですが。

先ほども言いましたように、当面、緊急的な、非常に危険性のあるようなもの、台風ということじゃなくても、この前の話があったような問題も含めて、それに対応するものが即ないということが非常に大きな問題ではないかというふうに思います。地域に生きている人間にとっては、予算があろうとなかろうと何とかしてほしい、自分たちの生活を守ってほしい、これが当たり前の話なんです。それに対応するようにして地域環境整備事業というのができたわけですから、私の今回の話はそれはそれとして、これを充実させるというのは4番議員がいろいろ質問されるでしょうから。

それと離れた、その枠に入らない問題を、地域振興という形でつくっていったらどうか。これは、その当時、十数年前に、熊本県のある市町村が、私が今言おうとしているようなことに対して5,000万円、その当時付けておりました。こういうやり方があるんですよ。だから、今の生活環境整備事業と同じように、5,000万円を地区割りで配しながら、分配しながら、そして執行できなかった分については戻しているわけですから、今回の決算で5,000万円の予算で4,573万円しか使ってないと。後は戻ってきているわけです。使えば、無駄じゃなくて、地域の活性化につながる。甘木町もよその町も一緒だと思う。

自分たちでやりたいと思っても、予算がない、予算がないと言われると、この前、議会報告会でもそういう意見が多々出ました。何か地域でやろうとしたって、結局、金がない、金がない。いや、金はないことはないですよと私言ったんですけども、あまり通じなかったんですが。使い道だと。だから、地域環境整備事業というものが非常に有効性を発揮し、今日、地域の皆さんに親しまれている。これも、4番議員が明日、いろんな角度から前向きに質問されると思いますので、それができるならば、できているわけですから、私は地域振興、そして先ほど言ったような問題も、地域の中で行政と話し合っ、組まれた予算を使う。しかし、めちゃくちゃ使うわけじゃないですよ。ちゃんと令和3年の決算でも、5,000万円の枠を使い切っていないわけですから。全部それは市のほうに戻しているわけですから。それは、地域のコミュニティあるいは区会長会、地域の方々の考え方でどうするかこうするかを決めていけばいいわけです。

私は、市長のこれからの企画部も含めて大きな大型の仕事も、先ほどからも話が出ている問題もあるでしょう。しかしながら、地域に根づいた小さな問題——小さいか大きいかは一応置いといて、必要なものを自由に使える、そういった制度、条例をつくられることは勇断だと思います。それは全くゼロからでしたから。昭和54年だと思います。私が入った年です。そのときの市長が、塚本倉人市長だったと思うんだけど。名前はどうでもいいですけど。そういう市長トップの考え方でそれができ上がって、今日、非常に重宝がられているということで、上乘せした形の、今の朝倉市の財政的なものから見れば、5,000万円、あれは僕は1億円ぐらいでもいいと思うんだけど、一応5,000万円として、そういう

ものをつくり上げて、みんな使いなさいと。それこそ、コミュニティが自分たちの発案で何かをしようという形ができ上がってくると思うんです。だから、あんまり限定をしないで、それから先は市の常識と地域の常識に基づいた執行という形を取っていく。これは恐らく、根づいたら地域にとっては非常に大きなものがあると思います。今、甘木町も、地域の中から、自分たちはこうしたいんだけど、なかなか市の予算がないということで蹴られている、こういう意見を聞いております。ぜひぜひ、そういうことが少なくとも来年以降無くなるように、市長、お願いしたいと思いますが、私の見解、いかがでしょうか。

○議長（半田雄三君） 市長。

○市長（林 裕二君） 地域環境整備事業、お話のように昭和54年からですから、もう40年間、非常に地域振興のために続いてきたということでもあります。その中で、もうちょっと使いやすい、使い勝手がいい必要があるんじゃないかということでございまして、対象事業を少し増やしたところでもあります。

対象事業についてももうちょっと柔軟に考えるということ、それから単年度の会計でやっている事業でございますので、毎年500万円ぐらい、確かに数年、トータル的に執行残が出ておりますので、これらをどうにかできないかと、必要とする地域の事業に使えないかといったことでもありますので、そういったことについてしっかり研究してやっていきたいというふうに思います。

○議長（半田雄三君） 16番実藤議員。

○16番（実藤輝夫君） これは、私が従来から、昔から言っておる新たな枠のやり方、林市長が勇断をもって令和5年からそういうのができたということであれば、昭和54年に市議会議員になりました私が、最初の時の環境整備事業がつくり上げられた時なもんですから、非常にありがたい。私が市民に代わりまして、市民はこれを望んでおりますので、しつこいようですが、これはぜひぜひ検討をお願いしたいと思います。

次に、現庁舎移転後の活用と甘木公園の開発ということで出しております。

これは、実は3月議会で市長とここでやりあって、最終的に市長もいろいろ考えておられるということで幾つか出てまいりました。個別的な話は別として、やはり市庁舎が来年の5月、いよいよ工事が着工されると。令和7年末までには移転するということが公表され、私も市民にそれを——限られた方ですけども——御連絡をしました。

この点について、そうなってくると、ますます3月時点よりも現在のほうが、現庁舎どうなるん、その後どうなるんだという話が出てまいります。この前も、私のところにもその問合せがありました。

甘木公園、私も小っちゃい頃からここに慣れ親しんで、ここで育ってきた一人なんですけど、思いのほか、甘木・朝倉市民よりも、よその市民の方のほうが甘木公園——私たちは丸山公園と言っていますけども——は評価が高いんです。すばらしい公園。私もよそに行って、春に桜を見ますと、本当にやっぱりすばらしいなと。今も整備がされていますから、

どんどんきれいになっていますけども。しかし、それ以上に、これはというのはまだまだないような気がします。現庁舎と、これを解体して、それで何かをつくるというのが明確になればまた一つの考え方でしょうが、これを生かすことはできないのかと。そうすると、箱物というのは、お城と一緒に非常に重要な拠点になるわけです。

丸山公園の整備、これを一つの専門的な目から見て、私、1つだけ提案していきますが、佐賀の武雄というところありますよね。あそこに御船山というのがあるんです。あそこに行きました。そしたら、すばらしい池の中にアートが、芸術、ぱっと映し出されて、一つの名物になっていました。夏のシーズンでしたけども。

丸山公園というのは、今、都市計画のほうも頑張って、遊具、その他いろいろ頑張っております。私も、その中に入っているいろいろな意見交換したりしているんですが、本当に市民代表として、みんなと一緒に、支所の職員と一緒に何かよくしていきたい、この願いです。

市長、なかなか現庁舎をどうするかという話は、もう近々、令和7年の末に移転した後、どうしようかという話じゃ、地域、ここは密集地とは言いませんが、非常にここを心のよりどころにしている人もおるわけですし、甘木中学校もありますし、この問題もPTAを通じてあるいは地域の方々からもこの開発をどうするのかと。だから、丸山公園も含めて、これと一体として考えるというのが私の考え方ですが、別々に考えてどうなるのかというのものもあるかもしれません、耐震構造も。だから、どれくらいかけてやればどうなるかという、これもまだ現実的には3月に私はここで提起したわけですけども、今日12月ですけども、全然具体的な話は進んでいないということです。

今、私もあることで、山田市の山田高校の前を通っていきます。ようやく解体されました。更地になっています。しかし、あそこは周りはそんなに密集地ではありませんので、それほど大きな問題はないと思いますけど、ここは早急に一つの考え方を出していかないと、令和7年から、さあ、今からどうしましょうかでは、山田高校のように何十年間放置されたような状態が続く。まさに、これは廃屋として残るのか、解体してしまっただけで、後は何も知りませんとなるのか。こんな無責任な形では、繰り返しますけど、向こうには復旧・復興の白亜の殿堂としての市庁舎ができて、ここはどうなるのというのがやはり地域住民の不安であるし、放置されれば危険性を伴う、不満になっていくというふうに思います。市長、この見解について、どう思われますか。

○議長（半田雄三君） 市長。

○市長（林 裕二君） 現庁舎の新庁舎移転後の活用については、私も、とても、新庁舎ができてから、さあ、それからやろうと、考えようということではいけないというふうに考えております。

今、縷々言われましたように、安全性、そしてこの地域の発展性、そしてまた、議員は今日は甘木公園と一体的な考え方で検討したらどうかという御提案でございます。そういったことも含めまして、きちっとした議論をして、そして地域の方、それから市民の皆さま

ん方、そういった方々が納得して、そしてやっぱり活用をいろんな形でしていただけるような活用方法ということが必要でございますので、しっかり、なるだけ早く、いつまでとはちょっとこの場では申し上げられませんけれども、検討して、議会の皆様方にお示しができるようなふうにしたいというふうに思います。

○議長（半田雄三君） 16番実藤議員。

○16番（実藤輝夫君） 今、結論というわけにもいかないと思いますけども、早急にやると、考え方をまとめていくということで、今日の私の一般質問の問題提起として。

一体化するかどうかというのも一つの案ですけど、それは個別にやらざるを得ない場合もあるかもしれません。ただ、両方を生かしていく方法はないのか、ということです。1つだけやって、1つはそれ以上何もしないということではなくて、せつかく隣接して、すぐに使えるものがあって、両方生かさない手はないだろうというのが私の考え方ですので、一体化が一つだという形ではありませんけども、それがベターではないかという考え方をしています。

これは、地域、私だけでもないし、甘木町、朝倉市、朝倉市議会議員の皆さん方も含めて、英知を含めて、それから地域の住民の方、コミュニティの方、みんなで1つの大きな財産であります丸山公園（甘木公園）というものを生かしていきたい。これは、町、地区だけの問題ではないという私は考えております。立石も隣接しておりますし、巻き込むような大きな枠の中に。

これは3月も言いましたけども、三奈木の水の文化村の話を3月にずっとやり取りもして、供用開始がどうだこうだとか、十文字公園の話と、先ほどでましたけども。これを俯瞰、上から見て、こちらとこちらとこちらというような取り合いができるような施設というのも考えられる。1か所だけの集中というのもありますけども、朝倉市には、Aのところにはこういうものがありますよ、Bのところにはこういうところがありますよ、Cはこうですよというふうにして、今、一つの素材があるわけですから。そして、今度、上秋月から秋月、一つの流れで、私は歴史観光回廊、市長は水の回廊と言われる。矛盾はしないと思います。一緒だと思っただけども。こういったものを、全体を俯瞰して、そして一つの考え方、甘木・朝倉・杷木構想をつくり上げていくという中に、これも一つ置かれたたらいかがかというふうに提言をしておきます。これだけではありませんので。

市長は、これやるということを明言されましたので、次に移りたいと思います。

時間の配分で、最後になりました。これが、議員の私の役割の一つであろうと、財政の見通し。

長年やってきまして、何十年、財政問題を当時の部長、課長、係長と丁々発止やってきた私としては、今まさにこれから市長が大きな課題に対して財源を必要としていく、歳入歳出を図りながら、一つの大きな事業をしていかないかん。これは、皆さんも、1期生の方は別として、十数年前にちょうど、今は亡き堀内課長の時代。彼は、部長から副市長に

までになりましたけども、残念ながらお亡くなりになりましたが。それから、現総合政策課長の佐々木係長、この2人と、堀内課長と係長と私と、何年も何年も財政をやってまいりました。時には3時からやって8時、5時間ずっとぶっ続けでやったこと、何回もありました、いろんな面で。

やっぱり最終的には、いろんなことをやっていく裏づけというものは財政ですから、この財政の見通しというものが、平成28年頃に一回でき上がったんですが、御承知のとおり、豪雨災害で吹っ飛んでしまいました。数年前、暫定的なものがありましたけども、これも暫定的なものであって、これから先、財政の裏づけを基にした事業計画、これこそまさに朝倉市にとって重要なことではないかと思います。

午前中から、そしてまた明日もいろいろな、朝倉市の発展、地域要望、こういうのが出され、そして市長も一つの考え方を打ち出されていくと思います。その中で、財政の見通しを、もう豪雨災害を盾に取ってまだまだという話ではなくて、それを基にしながらも、新しい財政10か年計画というのができ得るはずです。やらなければ、大型事業その他、個別の事業もできません。市長、いかがですか。

○議長（半田雄三君） 市長。

○市長（林 裕二君） 財政の見通しについては、当然、毎年財政の状況を把握しながら予算編成等をやっておるわけでありまして、それとは別に財政の見通しと、議員がおっしゃっているのは10年というお話ですけれども、そういったことだろうというふうに思います。

これから先、やっぱり大型事業もやっていく、そこから新たな行政需要も、予算をするものも出てくる時代になりました。DXもそうです。それから、環境の対策も新しいものです。そういったことを考えると、非常に予測が難しい部分はありますけれども、世界経済状況等。財政見通しを立てることは、行政運営にとって重要なことでもありますし、私もいろいろと判断していく上で参考にすべき一つの大きなツールにもなりますので、財政見通しについてはつくっていくということでやらせていただきます。

○議長（半田雄三君） 16番実藤議員。

○16番（実藤輝夫君） 最後に、財政の見通しをつくるということがいかに大事かというのは、先ほど述べましたように、これから先なされていくであろういろいろな事業に対する裏づけになる。もう一つは、今現在、ふるさと納税のおかげといいますか、基金に自由に使える金が約100億円近く。財政調整基金も約42億円、こういった中で、これがいつまで続くかどうかは分かりませんが、しかしながら、一定の使える金として、今有効に使える可能性は、ふるさと納税が来年、再来年、即なくなる、こういったことはちょっと考えられない状況ですので、この入り方がどれだけか、それほど予測はできませんが、幸いにして昨年が24億円というすばらしい実績を上げております。これに基づく基金が、先ほど述べたような金もありますし、今、林市長が2期目を迎えて1年たち、来年以降なされ

るとすれば、この有効活用というものができると。金はないことはない、使い方だというふうには私は思いますし、林市長は十分にその点を御理解をされていると思います。ぜひぜひ、先ほどから述べておりますような市民が本当に必要とするもの、これを与えてこそ行政の仕事である。そして、最初に述べましたように、朝倉フィロソフィーという、職員が物心両面に幸福を追求し、そしてそれがひいては市民サービスにつながり、市の発展につながると、こういうことを私は信じております。

市長以下、今日の私の話を、職員の方が「やらされる」ということではなくて、自らが考え自らが実行していくという立場に立っていただきたい。これは決して恥ずかしいことではなくて、強制されることでもない。一人一人が人生哲学に基づき、そして自分の人生哲学。私も毎朝、ミャンマーから買ってまいりましたお釈迦様に拝みながら、今日の1日を無事に過ごせますように、友人、知人、みんなが幸せに過ごせますようにということで、私も精進しますという形で拝んでおります。本当に私も未熟な男でございますけども、この歳になりまして、少しでもより良い生活ができるように皆様と共に頑張っていきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

終わります。

○議長（半田雄三君） 16番実藤輝夫議員の質問は終わりました。

以上で、本日の日程は全部終了いたしました。

次の本会議は、7日午前10時から行い、一般質問を続行いたします。

本日は、これにて散会いたします。

午後4時10分散会